

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

気付くこと、寄り添うこと

横浜市立飯島小学校

六年 橘 新太

福祉について考えようと思った時、ぼくは五月に祖母が入院した時の家族の出来事を思い出した。

いつも元気で活動的な祖母が大動脈解離という病気になり手術をし一ヶ月半入院した。突然大きな病気になり、病気になった祖母が一番大変で辛いのだとぼくは思っていた。

ぼくは週末しかお見舞に行けなかったけど母は仕事があっても毎日病院に行き、家のこともやって、ぼくの習い事の送り迎えもしてとても忙しそうにしていた。

ある夜、父と話している母が大きな声で泣き出してしまった。母が泣いてしまった理由は、沢山のことを母一人が背負ってしまっている状態で苦しくなってしまったということ。母が

泣いてしまうまで父もぼくも母の大変さを感じてはいたけれど、「大丈夫だよ」という母を見ているだけだった。そこから父とぼくは自分で出来ることは積極的にやるようにして、母は祖母の退院まで仕事を休んだ。

病氣をすると、病氣になった本人はもちろん、周りの家族の生活も一変してしまう。病氣の人を支える人が辛くなってしまうように小さなことでも何かに気付き一緒に寄り添うことが大切なんだと、ぼくは身をもって知った。

無事退院した祖母は今リハビリを頑張っていて、母はいつもの騒がしい母に戻った。

ぼくの考える福祉は、社会全体で考えるところでも小さなことかもしれない。でも身近な人の変化に気付き寄り添うことが一人でも多く出来るようになれば、また他の誰かに手を差し伸べることが出来るのではないかと思う。

自分らしさを失わないように、困った顔や泣き顔がまた一つ笑顔に戻れたなら、それを繋げることでより優しい社会になってほしいとぼくは願う。